



Title	欽定英訳聖書における＜罪＞の概念化：＜罪は重荷である＞
Author(s)	大野, 祐弥
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 85-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/77043
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

欽定英訳聖書における〈罪〉の概念化 〈罪は重荷である〉

大野祐弥

1 序論

本研究は、欽定英訳聖書 (the Authorized Version of the English Bible) における〈罪₁〉という概念が、どのように表現されているか、またその言語表現が私たちの理解をどのように構築しているか、という問いに対して、認知言語学的な視点からの回答を試みたものである。

第2章で、聖書における〈罪〉の概念化を論じた先行研究を概観し、それらの問題点を指摘する。第3章では、本研究が用いる認知言語学の理論的枠組み「概念メタファー理論」と「スクリプト」を紹介する。続く第4章において、〈罪〉を表す複数のメタファーの一つ、〈罪は重荷である〉という概念メタファーを、聖書の用例を取り上げながら考察する。第5章で全体の結論を述べる。

2 先行研究

本章では、先行研究を概観し、その問題点を指摘した上で、本研究の方法論を短く導入する。

2.1 認知言語学的アプローチ

聖書において罪がどのように概念化されているか、この問題に認知言語学的視点から取り組んだ研究として Sanders (2016) と Kuczok (2018) を取り上げる。これらの研究は共に、聖書における罪がどのように表現されているか、何に喩えられて理解されているかという問題を、概念メタファー理論 (本稿 3.1 節で詳述) を用いて考察した研究である。以下の表1は、彼らの分析に共通・類似するメタファーをまとめたものである²。

Sanders (2016)	Kuczok (2018)
“an agent or animal of prey” “a master who owns us such that we are slaves to “sin”” “captivity” (※) “trespassing” “being lost” (※) “breaking the law” (※) “pollution” (※)	“AN ANIMAL” “SNAKES OR LIONS” “SLAVEMASTER or RULER” “SLAVERY” “KING” “ENEMY” “DEVIATING FROM THE PATH,” “IMPEDING PROGRESS DURING A JOURNEY,” “IMPENDING THE PROGRESS UPWARDS,” “FALLING DOWN” “GETTING LOST” “BREAKING THE LAW OR COMMITTING A CRIME.” “BEING JUDGED AT COURT” “STAIN OR IMPURITY”

表1 Sanders (2016) と Kuczok (2018) の分析のまとめ

2.2 先行研究の問題点

彼らの研究には、次に挙げる3つの問題点がある。(1) メタファーを列挙するのみで、そのメタファーがどのような構造をしているかについての考察が不十分であること。概念メタファー理論を用いた研究は、後述するように、起点領域 (例えば〈重荷〉) と目標領域 (例えば〈罪〉)

¹ 本稿の表記について、〈 〉に入れた語句 (英語の場合は小型大文字) は、言語表現ではなく、その語によって表される概念 (concept) を指すものとする。

² 表1について、共通・類似すると考えられるものは同じ行にまとめた。また、Sanders (2016) の列において、(※) を付したものは聖書箇所が明記されておらず、どの聖句を根拠にして設定された概念メタファーであるか特定不可能のものを表す。

³ 両研究に共通していないものを挙げると、それぞれ以下のようなものがある。Sanders (2016) : “lack of spiritual hygiene” “unfaithful wife” “forsaking friendship” “sick” “disintegration” “addiction” “masquerade” “vandalism” など。Kuczok (2018) : “BECOMING INDEBTED, DEBT” “A PLANT” “A PHYSICAL OBJECT (“A WALL” “A STING” “A FOOD” “ICE” “MONEY” “WIND”)” “CARRYING A BURDEN” “DISOBEDIENCE” など。

の間の構造的な対応関係に注目することが最も重要であり、両先行研究ともにその点の考察が十分に行われていない。(2) Sanders (2016)では、聖書箇所が明記されておらず、メタファーの設定が適切であるかの検証が不可能であること。(3) Kuczok (2018)では、文脈が軽視されており、メタファーを用いた<罪>の概念化の重要な側面が見落とされている可能性があること。例えば、SIN IS CARRYING A BURDEN<罪とは重荷を負うことである> (ibid. p180) というカテゴリーに分類される例として、“Our transgressions and our sins weigh upon us, …” (Ezekiel 33:10)と共に“But you have burdened me with your sins; you have wearied me with your iniquities” (Isaiah 43:24)が挙げられている。確かに、これらを同じ<重荷>メタファーとして分類するのは適切であると考えられる一方で、2つの聖句の間に存在する重要な違いが見落とされている。すなわち、一つ目の例に含まれる“us”が「人間」を指しているのに対し、二つ目の例における“me”は「神」を指示する代名詞である、という違いである。同じ<重荷>メタファーであるとしても、それを人間が負っているのか、それとも神が負っているのか、その行為主体の違いによる意味の違いは看過されるべきではない。

これらの問題点を踏まえ、本研究では以下の3つの方策を立てて分析を進めた。(1') 各概念メタファーの内部構造を詳細に考察し、そのメタファーの「写像」を図示した。(2') 罪を表す代表的な3語(sin, iniquity, transgression)の「一覧表⁴」を作成し、その一覧表をもとにメタファー表現を特定、また本文では聖書箇所を必ず明記するようにした。(3') 文脈を調べ、罪に関して「誰」が「何」をしているのかに注目した。特に、各引用聖句における人称代名詞が誰を指すものであるかを調べ、明記した。この第3の方策により、同一の概念メタファーであっても、行為主体が誰であるかによって、意味に重要な違いが生じることが判明した。

3 理論的枠組み

本章では、本研究が用いる理論的枠組み、「概念メタファー理論」と「スクリプト」を紹介する。

3.1 概念メタファー (conceptual metaphor)

まず、概念メタファーとは、「あるものを、それとは別のものの観点から理解する思考様式」を指す。以下では、本稿に特に関係する概念メタファー理論の重要な要素、すなわち「写像(mapping)」と「ハイライト (highlight)」について紹介する。

3.1.1 起点領域 (source domain) と目標領域 (target domain) の間の写像 (mapping)

LIFE<人生>について語る際、私たちは JOURNEY<旅>のメタファーを用いることが多い (Lakoff and Turner 1989:3)。例えば、“going ahead with our plans,” “getting off to a good start,” “I don’t know which path to take”などの<旅>についての語彙が、<人生>の諸局面を語る際にも用いられる。この LIFE IS A JOURNEY<人生は旅である>という概念メタファーについて、JOURNEY<旅>を起点領域 (source domain) と呼び、LIFE<人生>を目標領域 (target domain) と呼ぶ。これら2つの概念領域の間には、写像 (mapping) と呼ばれる構造的な対応関係が存在する。この概念メタファーの両領域間の写像関係を図示すると以下の表2のようになる。

4 一覧表作成の具体的な手順は以下である。まず、ウェブサイト版聖書 BibleGateway (<https://www.biblegateway.com/>) を用いて、罪を表す代表的な語“sin(-s),” “iniquity(-ties),” “transgression(-s)” が生起する節を検索した。検索の結果表示された節をすべて Microsoft Word に転写、罪を表す語の一覧表を作成した。その一覧表をもとに、各節を分析、メタファー表現に注目し、分類を進めた。例えば、“Wash me thoroughly from mine iniquity, and cleanse me from my sin” (Ps. 51:2) という聖句においては、“wash”また“cleanse”という表現が、罪を<汚れ>として描写しているとし、これと類似する表現をまとめて<罪は汚れである>という概念メタファーの分類を作成した。これと同じ方法で、<罪>を表すメタファー表現を6つに分類した (脚注5を参照)。

Source Domain (起点領域)		Target Domain (目標領域)
JOURNEY	→	LIFE
traveler	→	person leading a life
journey / motion (toward a destination)	→	leading a life (with a purpose)
destination	→	purpose of life
obstacles (in the way of motion)	→	difficulties (in life)
distance covered	→	progress made
path / way of the journey	→	the manner / way of living
choices about the path	→	choices in life

表 2 Kövecses (2006:116) より抜粋

この構造的な対応関係によって、それ自体では抽象的な目標領域（＜人生＞や＜罪＞など）についての体系的な理解が構築される。

3.1.2 ハイライト (highlight)

特定の概念メタファーは、目標概念の特定の側面をハイライト (highlight) する (Lakoff and Johnson 1980:13; 46-48)。例えば、IDEAS＜考え＞という抽象概念を理解するために用いられる2つの概念メタファーを考えてみよう。まず、IDEAS ARE RESOURCES＜考えは資源である＞という概念メタファーは、“Don’t *waste* your thoughts on small projects”などの言語表現において例示されるものであるが、これは「使われ、貯められ、無駄にされることもあるものとしての IDEAS の側面」をハイライトしていると言うことができる。一方で、“That idea *died on the vine*”などの言語表現に見られる IDEAS ARE PLANTS＜考えは植物である＞という概念メタファーは、「植えられ、生長し、枯れることもあるものとしての IDEAS の側面」をハイライトしていると考えられる。このように、一つの目標概念に対して、複数の概念メタファーが用いられ、それぞれが異なった側面をハイライトすることで、その目標概念の体系的な理解を構築している。

3.2 スクリプト (script)

ここでのスクリプト (script) とは、「特定の文脈における一連の出来事を描写する構造 (a structure that describes appropriate sequences of events in a particular context)」(Schank and Abelson 1977:41)を指すものとする。概念メタファーを用いた＜罪＞の表現また理解には、このスクリプト的な構造を見出すことができる。すなわち、＜罪＞という概念に、物語的な（＝時間とともに展開する）構造が付与されていることによって、読者は自分と罪との関係、また神との関係を、動的なものとして理解できるようになる、ということである。

また、このスクリプトは、特定のステージにおいて分岐 (diverge) し、異なる展開や結末を生み出すものである。例えば、LIFE IS A JOURNEY＜人生は旅である＞という概念メタファーにおいて、「障害物にぶつかる」という特定のステージは、①障害物を取り除く（問題を解決する）、もしくは②回り道をする（異なる方法を選択する）という2つのスクリプトへと分岐し得る。これと同様に、聖書においても、＜罪＞という抽象概念に対して、時間とともに発展し分岐する物語的な構造が付与されており、このスクリプトによって、読者は罪・人間・神との間の動的な関係を理解することが可能となる。

4 ＜罪＞を表す概念メタファー

ここまで、先行研究を概観し、また理論的枠組みの紹介をしてきた。本章では実際に、＜罪＞を表す概念メタファーを分析していく。欽定英訳聖書において観察された複数の概念メタファー⁵のうち、ここでは特に＜罪は重荷である＞というメタファーを取り上げる。

⁵ 観察された＜罪＞の概念メタファーは以下の6つ。＜罪は重荷である (SIN IS BURDEN)＞、＜罪は汚れである (SIN IS IMPURITY)＞、＜罪は記憶である (SIN IS MEMORY)＞、＜罪は隠され・探し求められ・見つけ出されるものである (SIN IS SOMETHING TO BE HIDDEN, SEARCHED FOR AND DISCOVERED)＞、＜罪＞を表す＜旅 (JOURNEY)＞のメタファー、＜罪＞の擬人化 (personification)

4.1 <重荷>としての罪

本章では<罪は重荷である>という概念メタファーを考察する。このメタファーによって焦点が当てられる<罪>の側面を正しく理解するためには、<重荷>を負う「主体」の違いを区別しなくてはならない。すなわち、人間が罪を負う場合と、神が罪を負う場合との区別である。

まず、罪を負う主体が人間の場合を分析し(4.1.1 節)、それに続けて神が主体の場合を考察する(4.1.2 節)。それぞれの分析をもとに、<重荷>メタファーの写像関係をまとめ(4.1.3 節)、このメタファーに内在するスクリプトを図示する(4.1.4 節)。

4.1.1 人間が<罪>を負う

まず、<罪>を負う主体が人間の場合を見ていこう⁶。

Isaiah 1:4⁷ (speaker = the prophet Isaiah)

Ah sinful nation, a people *laden with iniquity*, a seed of evildoers, children that are corrupters: they have forsaken the LORD, they have provoked the Holy One of Israel unto anger, they are gone away backward.

ここでは、預言者イザヤが人々を“a people laden with iniquity”（咎重き民）と呼んで非難している。彼らの罪とは、“forsaken the LORD”（主を捨て），“provoked the Holy One of Israel unto anger”（イスラエルの聖なる方を侮り），“gone away backward”（背を向けて離れ去った）というものである。その罪の結果、彼らは“laden with iniquity”の状態になっているということである。この記述から推論されることは、まず、彼らの犯した罪は彼らの<所有物>になっているということである。すなわち、彼らは<罪>という<重荷>を自らの所有するものとして負っているということである。この解釈は、次の聖句によっても支持される。

Numbers 9:13⁸

But the man that is clean, and is not in a journey, and forbeareth to keep the passover, even the same soul shall be cut off from among his people: because he brought not the offering of the LORD in his appointed season, that man shall *bear his sin*.

ここでは、<罪>を表す語“sin”が三人称単数代名詞の属格“his”を伴っており、罪がその人の<所有物>であるということが明確化されている。

続いて、同じように属格の代名詞が用いられながらも、異なる意味を表している例を見てみよう。

Lamentations 5:7⁹ (prophet prays toward God)

Our fathers have sinned, and are not; and we have *borne their iniquities*.

ここでは、<罪>を表す語“iniquities”が三人称複数代名詞の属格“their”によって修飾されている。この聖句における“we”は、自ら犯した罪を負っているのではなく、彼らの父祖たちの罪を負っているという。この記述から、私たちは自分の罪のみならず他人の罪をも負わなくてはならない、という推論が生じる。このような推論は日常的な経験に基づいていると考えられる。すなわち、日々の生活において自分以外の誰かの荷物を運んであげる、という経験である。

ここまで、私たちが自分の罪のみならず他人の罪をも負わなくてはならない、ということを示す聖書の記述を見てきた。それでは、そもそも「罪を負う」とはどういうことを意味するのだろ

⁶ 以下の聖書引用について、強調はすべて筆者による。太字は罪を表す語を、斜字はメタファー的表現を、下線はその他の理由で注意を要する表現であることを示すものとする。また、各引用聖句の脚注に記した日本語訳は『聖書 新改訳 2017』（新日本聖書刊行会）による。

⁷ 「わざわいだ。罪深き国、咎重き民、悪を行う者どもの子孫、墮落した子ら。彼らは主を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、背を向けて離れ去った。」（新改訳 2017）

⁸ 「身がきよく、また旅にも出ていない者が、過越のいけにえを献げることがをしないなら、その人は自分の民から断ち切られる。その人は定められた時に主へのささげ物を献げなかったので、自分の罪責を負う。」（新改訳 2017）

⁹ 「私たちの先祖は罪を犯し、今はもういません。彼らの咎は私たちが負いました。」（新改訳 2017）

うか。一つの解釈としては、上で見たように、＜罪＞を自らのものとして所有するというものであった。しかし、聖書の他の記述を見ると、さらなる意味が含まれていることが分かる。

Leviticus 24:15, 16¹⁰ (spoken by God; thou = Moses)

And thou shalt speak unto the children of Israel, saying, Whosoever curseth his God shall *bear* his **sin**. And he that blasphemeth the name of the Lord, he shall surely be put to death, and all the congregation shall certainly stone him: as well the stranger, as he that is born in the land, when he blasphemeth the name of the Lord, shall be put to death.

この聖句では、神を呪うものは誰でも罪を負い、そして石を投げて殺されなければならない、と記されている。この記述から、＜重荷＞として描かれた＜罪＞は、＜罰＞を意味するものであると考えられる。すなわち、罪を負うとは、罰を受けるということである。私たちは日々の生活から、重荷を負うことには何らかの苦しみが伴うことを知っている。この起点領域における知識が、目標領域における「罰の苦しみ」に写像されているものと考えられる。罪を自らのものとして所有すること自体、良心の呵責などの内面的な苦しみを引き起こすかもしれないが、石打ちによって死刑にされることは、その何倍も厳しい苦しみであると言えるだろう。

次に挙げる聖句は、私たちがどのようにして罪を負うに至るかを説明するものである。より厳密に言えば、誰が私たちに罪を負わせるか、という問いに対する回答が次の聖句で明らかにされている。

Numbers 12:11¹¹

And Aaron said unto Moses, Alas, my lord, I beseech thee, *lay not* the **sin** upon us, wherein we have done foolishly, and wherein we have sinned.

この聖句は、アロンという人物が、人々を率いるようにと神に選ばれたモーセに対して嘆願している場面の一部を描写したものである。その嘆願の内容とは、「罪を私たちに負わせないでください」というものである。モーセが神の代理として、神のことばを人々に取次ぐ立場にあったことを考えると、モーセに対するこのような嘆願は、神に対する間接的な祈りであると考えられることができる。このことは、アロンまた人々が、人間に罪を負わせることができるのは神のみである、という認識を持っていたことを表している。神のみが人々に罪を負わせる権威を持っておられるという考えは、新約聖書の殉教者ステパノ（ステファノ）のことばにも見出すことができる。

Acts 7:59, 60¹² (they = people; he = Stephen)

And they stoned Stephen, calling upon God, and saying, Lord Jesus, receive my spirit. And he kneeled down, and cried with a loud voice, Lord, *lay not* this **sin** to their charge. And when he had said this, he fell asleep.

人々からの石打ちにあう中で、ステパノはひざまずき、神（主イエス）に対して大声で叫ぶ。「主よ、この罪を彼らに負わせないでください。」彼がここで呼びかけているイエスもまた、十字架上で父なる神に叫び訴えた。「父よ、彼らをお赦してください。彼らは、自分が何をしているのかが分かっていないのです。」（Luke 23:34, “Father, forgive them; for they know not what they do.”）

これまでの分析から、＜重荷＞は＜罪＞のみならず、罪の結果としての＜罰＞をも表していることが判明した。

¹⁰ 「あなたはイスラエルの子らに告げよ。自分の神をののしる者はだれでも罪責を負う。主の御名を汚す者は必ず殺されなければならない。全会衆は必ずその人に石を投げて殺さなければならない。寄留者でも、この国に生まれた者でも、御名を汚すなら殺される。」（新改訳 2017）

¹¹ 「アロンはモーセに言った。『わが主よ。どうか、私たちが愚かにも陥ってしまった罪の罰を、私たちに負わせないでください。...』」（新改訳 2017）

¹² 「こうして彼らがステパノに石を投げつけていると、ステパノは主を呼んで言った。『主イエスよ、私の霊をお受けください。』そして、ひざまずいて大声で叫んだ。『主よ、この罪を彼らに負わせないでください。』こう言って、彼は眠りについた。」（新改訳 2017）

4.1.2 神が<罪>を負う

人が罪を負うという場合に比べると数は少ないが、神（キリスト）が罪を負うという記述もいくつか見られた。

Hebrews 9:28¹³

So Christ was once offered to *bear* the **sins** of many; and unto them that look for him shall he appear the second time without sin unto salvation.

キリスト者は、キリストの十字架が他ならぬ自分のためであったと信じ、またそのように告白する。すなわちキリスト者の信仰は、救い主なるイエスが、人間が受けるべき罰を肩代わりし、私たちの代わりに苦しみを受けられた、という事実に基づいている。言い換えると、キリストは、<罪>またそれによる<罰>という<重荷>を、人間に代わって負われたということである。上述のヘブル人への手紙の著者は、キリストが「多くの人の罪を負うため」に献げられたと記すことで、読者にそのことを思い起こさせている。これと同様の記述が、同じ新約聖書のペテロの手紙第一にも見られる。

1Peter 2:24¹⁴ (his = Christ)

Who his own self *bare* our **sins** in his own body on the tree, that we, being dead to sins, should live unto righteousness: by whose stripes ye were healed.

人間が<罪>を負う主体であるとき、その人は基本的に、自らが犯した罪を負っている（前節の Lamentations 5:7 などは例外）。一方で、神が<罪>を負う主体として描かれている場合には、神はご自分のものではなく、人々の犯した罪を負っていることになる。このことは、起点領域<重荷>における一つの要素が、目標領域<罪>において二つの異なる要素に対応していることを示唆するものである。すなわち、「重荷を負う主体」という起点領域の要素が、目標領域において、「自らの犯した罪を負う人間」と「自らが犯したのではない罪を負う神」という二つの要素に写像される、ということである。

4.1.3 <重荷>メタファーの写像関係

これまでの考察のまとめとして、<罪>を表す<重荷>メタファーの写像関係を図示しておこう。

起点領域		目標領域
<重荷>	→	<罪>
重荷を負う	→	罪を自分のものとして所有する 罰を受ける
重荷を負う主体	→	罪を犯した人間 → 罪を犯していない神（キリスト）
自分の重荷を負う	→	自分の罪のゆえに罰を受ける
他者の重荷を負う	→	他者の罪のゆえに罰を受ける
重荷を負うことには苦しみが伴う	→	罰を受けることには苦しみが伴う
他者によって重荷を負わされる	→	神によって罰を受ける
他者の肩代わりによって重荷を解かれる	→	キリストの肩代わりによって罰を免れる

表 3 <重荷>メタファーの写像関係

この<重荷>メタファーは<罪>のどのような側面をハイライトしているのだろうか。第一に、このメタファーは<罪>を「私たちに苦しみをもたらすもの」として描き出している。重荷を負

¹³ 「キリストも、多くの人の罪を負うために一度ご自分を献げ、二度目には、罪を負うためではなく、ご自分を待ち望んでいる人々の救いのために現れてくださいます。」（新改訳 2017）

¹⁴ 「キリストは自ら十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるため。その打ち傷のゆえに、あなたがたは癒された。」（新改訳 2017）

うということ、何らかの苦しみを伴うものである。＜罪＞をこのように概念化することで、＜重荷＞メタファーは、＜罪＞の結果としての＜罰＞という概念にも焦点を当てている。また、このメタファーは、重荷が譲渡可能なものであるのと同様に、罰もまた、ある人から別の人へと転嫁（imputation）可能なものである、ということをも表現している。言い換えると＜重荷＞メタファーは、＜罪＞またそれによる＜罰＞を、人から人、もしくは人から神（キリスト）へと転嫁可能な事物として概念化しているということである。この側面は、他の概念メタファーによってはハイライトされておらず、＜重荷＞メタファーに特徴的なものであると言える。

4.1.4 ＜重荷＞メタファーのスク립ト

＜罪は重荷である＞という概念メタファーのスク립トを図示すると以下ようになる。

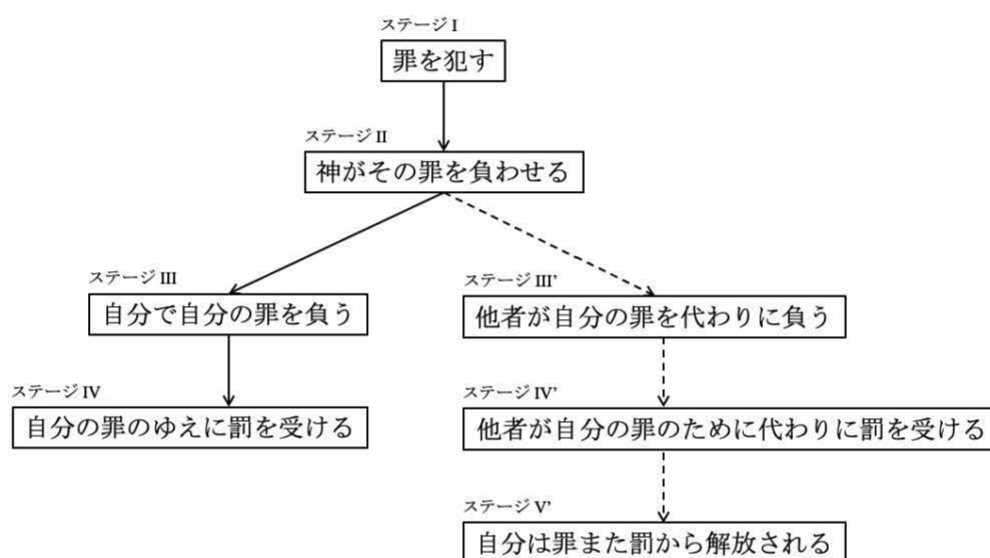


図1 ＜重荷＞メタファーのスク립ト

この図に示されている通り、＜重荷＞メタファーのスク립トは、三つ目のステージ（IIIとIII'）において分岐している。向かって左側へと分岐するステージI → ステージII → ステージIII → ステージIVのスク립トは、「人が自らの罪によって苦しむ」という物語である。こちらのスク립トにおける罪・人間・神の関係は単純なものである。すなわち、「私たちが罪を犯し、神がその罪を私たちに負わせ、私たちがそれを負い、その罰を受ける」というスク립トである。

それに対して、向かって右側へと分岐する破線で結ばれたステージI → ステージII → ステージIII' → ステージIV' → ステージV'のスク립トは、2つの解釈が可能である。一つは、「人々が父祖たちの罪を負う」という、旧約聖書のLamentations 5:7（4.1.1節を参照）に見られたスク립トである。このスク립トは、ステージIとステージV'を除いた、ステージII → ステージIII' → ステージIV'からなるものである。もう一つは、「キリストが私たちの受けるべき罰を肩代わりする」というスク립トである。ここでは、罪・人間・神の間の関係は複雑かつ動的なものとなっている。すなわち、「私たちが罪を犯し、神がその罪を私たちに負わせ、私たちがその罪を負う、しかしそこで神（キリスト）が介入し、キリストが私たちの罪を代わりに負い、私たちの受けるべき罰を肩代わりされる」というものである。

5 結論

＜重荷＞メタファーは、＜罪＞の結果としての＜罰＞に焦点を当てるものであることが分かった。その罪また罰という重荷を負う「主体」は、人間もしくは神のいずれかである。この区別によって、＜重荷＞メタファーのスク립トは大きく分けて2つの方向に分岐するものであること

が判明した。すなわち、一方は「人間が罪を負い、その罰を受ける」というスクリプト、もう一方は、「神（キリスト）が人間の代わりに罪を負い、私たちが受けるべき罰を肩代わりする」というスクリプトの2つである。

本稿では紙面の関係上、＜罪＞を表すメタファーの全てを分析することはできなかったが、概念メタファーまたスクリプトを用いた＜罪＞の概念化についての考察を結論すれば、以下のようなになるだろう。＜罪＞という、それ自体ではあまりに抽象的な概念に対して、概念メタファーが構造を与え、スクリプトが神と人間との間の動的な関係を描き出す。これによって、人間は＜罪＞を体系的に理解することができるのみならず、複数のステージからなるスクリプトを想起し、その物語における自分の立ち位置を想像することで、自らに関わる問題として、また神が介入される問題として、＜罪＞について思考することができるようになる。

謝辞

本稿は、筆者が2020年1月に大阪大学大学院言語文化研究科に提出した修士論文 *The Conceptualization of SIN in the Authorized Version of the English Bible* から一部を抜粋し、いくつか修正を施したものである。論文の執筆にあたり、渡辺秀樹教授、大森文子教授からは多大なご指導を賜りました。また、レトリック研究会の先生方、学生の皆様からも多くの助言をいただきました。感謝申し上げます。

引用文献

- Kövecses, Zoltan. 2006. *Language, Mind, and Culture: A Practical Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Kuczok, Marcin. 2018. The Biblical Metaphors of Sin: A Cognitive-Semantic Perspective on the English Version of the Bible. In *Linguistica Silesiana*, 39:171-186.
- Lakoff, George and Johnson, Mark. 1980. *Metaphors we Live by*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Lakoff, George and Turner, Mark. 1989. *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Sanders, John. 2016. *Theology in the Flesh: How Embodiment and Culture Shape the Way We Think about Truth, Morality, and God*. Minneapolis: Fortress Press.
- Schank, Roger C., and Abelson, Robert P. 1977. *Scripts, Plans, Goals and Understanding: An Inquiry into Human Knowledge Structures*. New Jersey: Laurence Erlbaum Associates.

ウェブサイト

Bible Gateway. (<https://www.biblegateway.com/>)

邦訳聖書

聖書 新改訳. 2017. 新日本聖書刊行会.